小さい者の一人が滅びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。

つのぶえ
TSUNOBUE

2020年 2月20日　第425号

社会福祉法人
小羊学園
住所 〒433-8105
静岡県浜松市北区三方原町2709-12
電話 053-584-3337 FAX 053-585-8488
E-mail sasaeru@kohitsuji.or.jp
H.P http://www.kohitsuji.or.jp/
発行人 稲松義人
印刷所 アド・アール株式会社

強度行動障害支援チーム　法人内浜松地区の生活介護施設スタッフで会議を組む

最近は「行動障害」と言われる現れを見せる人たちがいる。日常生活において何らかの不適応が見られる人たちである。彼らが不適応なのは、彼らが適応できない環境の方に問題があることも多い。さらに「強度行動障害」と言われるとき、その不適応行動は看過できない深刻な状態にあると言えるのではないだろうか。環境に適応できない彼ら自身が一番辛いのだろうが、周囲の人たちもどのように接してよいのか頭を抱え立ちすくんでしまう。彼らを受け入れるために様々な工夫がなされ、より適切な接し方を探りつつ試行錯誤が続く。忍耐のいる実践である。

聖書に、イエスに香油を施すために壺を壊して頭から注ぎかけた女性のエピソードがある。周囲の人はその行動が理解できず彼女を厳しくとがめるが、イエスは彼女の行為を肯定し受容する。

有益でないと思われる行動も、それに関わる人の捉え方によって、そこに大切な意味を見出すことができるということではないだろうか。　稲松義人

強度行動障害者を支える体制づくりとチーム支援

＊浜松市障がい者基幹相談支援センター主催の強度行動障害支援者フォローアップ研修での発表から抜粋

『強度行動障害者を支える体制づくりとチーム支援』

在宅支援センターぱぴるす　紅谷　純
三方原スクエア成人部　濱田裕子

【はじめに】

自閉症スペクトラムを有する人の中には、強いこだわりやパニック、自傷・粗暴行為など社会生活を営む上で支障をきたす行動で表出される方がいます。近年、臨床心理学分野では障害器質よりむしろ二次障害と定義されて研究が進んでいます。一方、支援現場では課題となる行動を軽減できるよう試行錯誤をしながら関わっています。

昨年度末、ある一人の男性利用者の事例において、小羊学園浜松地区で彼を支える仕組みづくりを進めました。この実践を1月24日に行われた「強度行動障害支援者フォローアップ研修」で報告させていただきました。報告内容を一部抜粋して紹介したいと思います。

【体制構築の経緯】

今年度、強度行動障害者支援における体制を整えるきっかけになったのは、ある成年がきっかけとなっています。彼（以下Aさん）は児童期に三方原スクエア児童部（以下スクエア）に入所して高等部卒業まで在籍していました。卒業を機にスクエアを退所して在宅生活に戻ることになり、日中活動は他法人の生活介護に通い、スクエアの短期入所を時折利用しながら在宅生活を続けてきました。しかし、昨年度末に生活介護事業所から利用制限が掛かり、彼の生活スタイルが組めなくなった経緯があります。

そこで小羊学園浜松地区管理会議で議論を重ね、彼を支える体制を構築していく運びとなりました。

【浜松地区管理会議での議論】

これまで日中活動として受け入れてくださった事業所から、支援体制の確保を理由に2019年度から利用日数を減らしたいとの報告がありました。家族としても受け入れ先がないことは、大きな生活課題になるため、基幹相談支援センターを通して短期入所を利用している当法人での受け入れ検討の依頼が来ました。浜松地区管理会議とは、法人内の浜松地区の部課長の会議で、各施設の報告や全体協議をする会議です。Aさんの次年度以降の通所日数の受入れ日数が減少するとの報告を受け、小羊学園内事業所で受け入れるべきか否かの議論となりました。

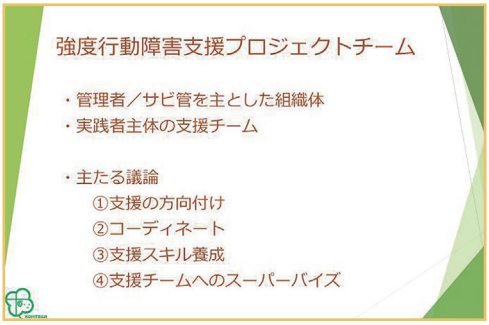
議論の中身は、児童期にスクエアに入所していた経緯や、日常的に短期入所利用があり、本人の特性を承知している小羊学園が、成人期のAさんを受け入れる必要性や役割があるのでは？との意見がある一方で、地域資源を考えた際に、生活介護事業所の役割としていずれかの事業所で受け止めることが出来ないか？との意見もありました。

仮に小羊学園の事業所で受け入れるにしても、1事業所に委ねることは、支援上大きな負担になると考えました。そこで、生活介護「風の丘」をベースに複数施設の職員で支える仕組みを作っていこうということになりました。

その背景には生活介護事業所で強度行動障害の利用者を積極的に受け入れる事業所が皆無ということがあります。中には「週1回なら」とか「月の内1週間程度なら」という前提で受け入れてくれる事業所もあります。しかし、利用者目線で物事を推し量ると、日ごとに活動場所が違うことは、本人にとってストレスでもあり、その場所場所で人間関係を構築しなければならず、不安感を増長させるとことになりかねません。一方、支援者目線で考えると、行動特性の強い利用者と日々向き合うことへの疲労やストレスが蓄積され、職員は疲弊感が増していきます。そうした状況下では虐待発生のリスクも高まることが予想されます。

そうならないために、Aさんを受け止めるにあたって、活動拠点を「風の丘」に固定し、対応する職員側を法人内の他事業所職員がチームを組んで支える方向性を打ち出しました。

【プロジェクトチーム】



チームは管理者・サビ管を主体とした、強度行動障害支援プロジェクトチームと実践者主体の支援チームの2層構造です。プロジェクトチームは、Aさんのみならず強度行動障害を有す

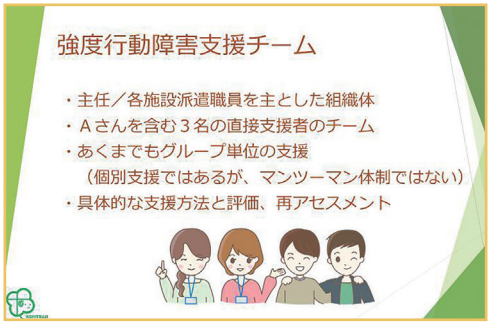
る人を支援する仕組みづくりを中心に協議するチームでその役割は以下です。

1：強度行動障害者支援の方向付け
2：在宅者・相談員・法人内事業所・支援チームとのつなぎ役やコーディネート
3：チームメンバーの自閉症スペクトラム（自閉症）に特化した研修などへの参加を経て、視覚的アプローチや空間構造化など、支援チームへのスキル養成（自閉症ｅサービスへの参加）
4：支援チームへの相談や助言などのスーパーバイズ

【支援チーム】

もう一つのチームは支援チームです。支援チームは、主任や各施設の派遣職員を主とした組織体で、Aさん含む計3名に対する直接支援を担当するメンバーで構成されています。チームコンセプトとして、Aさんのマンツーマン体制は取らずに、チーム単位での支援を行う事が挙げられます。

風の丘は、主にスクエア成人部入所者が通所する事業所です。Aさんの利用に伴い、19名の利用者から2名を選抜し、計3名のグループを増設し、風の丘職員＋他事業所職員1名の合計2名配置で支援体制を組みます。フォロースタッフは法人内の3つの生活介護事業所から1名ずつ。入所施設三方原からは各2名が、交代でフォローに入っています。



【支援チームの実践】

Aさんの風の丘利用時のフォロー体制については、風の丘の職員1名とフォロー施設の職員1名、計2名で支援を行うよう計画立てを行いました。

初めの2か月間は、短期入所で継続的に支援を行っているスクエアの職員が、実際の支援にOJTとして参加し、支援者3名体制の中でコミュニケーション方法や声掛けのポイント、更には活動の立ち上げのアドバイスなどを行い、風の丘での過ごし方のベースを作っていきました。

このOJTの期間を経て、女性同士のペアを作らないよう配慮し、1週目から4週目までの固定ローテーションが確立され現在に至っています。

【支援の方向性】

①プログラム立ては、風の丘のスケジュールにのり、午前は散歩、午後は室内・室外活動（天候により前後する事も）とし取り組みました。

②空間の構造化に関しては、Aさんへの視覚的刺激の遮断として、衝立で個室を作り活動に集中しやすい空間作りを行いました。他者が見えない事で集中してビーズ作業が取り組め、活動量が増えました。はがき作りなどの各工程を担う活動などは敢えて個室を利用せず他者と共に活動する機会を設けています。

③昼休みの休憩時間は服薬量が多く眠気が強い事、昼休みの具体的な過ごし方が分からないのではと2点を考慮し、事前に「昼寝時間」と設定し、昼寝スペースを提示し誘導する事にしました。空間を密室にする事は困難だった為、聴覚過剰への遮断として、ご本人の好きな音楽プレイヤーをイヤホンで聴いてもらいながら入眠する流れを作り、他者の出す音や生活音を気にする事なく、睡眠が取れる日が増えました。

【視覚的アプローチ】

ご本人の最大のニーズである帰宅について、Aさんが理解できる伝え方の工夫として、週間予定表（時間経過表）を作成しました。帰宅できる時間を黄色で示し、1日の中で予定表にシールを貼る時間を設け、黄色の帰宅まで、あとどのくらいあるのかを数量化する事としました。

予定表の提示を始め、帰宅までの日数を見える化した事で、支援者も統一した伝え方が可能となりました。また「帰宅願望」が聞かれた時には、この予定表を提示する事でAさんの安心に繋がるようで、これまでのような帰宅が原因となった不安感が減少しています。

もう一つのツールは1日の予定表です。誰とどのように活動をするのかを写真や文字で示して、見通しを持って過ごせるようにしています。

【ストレングスを活かした活動】

風の丘では、散歩に行き本人の表

出を見てみたい、何に興味があるか知りたい、といった声がチーム内から上がり、散歩に取り組み始めました。散歩の拒否も当初は見られましたが、実際散歩に出てしまえば犬のお散歩中の方との会話、様々な遊具のある公園、どんぐり拾いなど季節の変化を楽しめるポイントがたくさんあり、Aさんにとって楽しめる活動となっています。

第2にミニチュアのニット帽作成が挙げられます。これは散歩中に、コマ結びが行える事を目撃し、コマ結びで創作できる活動として導入されています。まだチーム全体で創作工程が共有できていない為、回数は多くはありませんが、ほぼAさんの力で作り上げる事ができ「母親や兄弟にプレゼントする！」と意欲につながる活動である為、今後も継続して取り組んでいきたいと思っています。

【家族との連携】

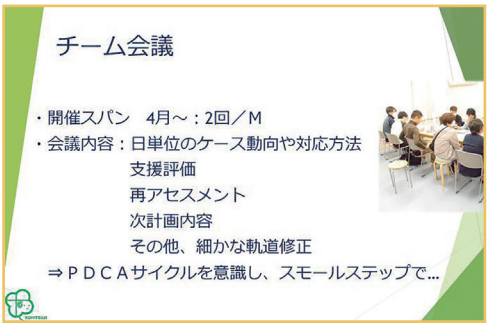
Aさんの大切な物が使用できないと、不穏が表出してしまう為、①忘れ物をなくす、②破損した物があれば速やかにご家族に連絡し代替えの物を持って来て頂く、などの情報を共有し、Aさんが安心して過ごせる様、合理的配慮を今後も行っていきます。

【支援チーム会議】

チーム会議はAさんを受け入れる前段階からスタートし定期的に行っています。受入れ前の主な協議は、具体的な支援体制・不安定要素を作らないための共有事項・不安定になった場合の対応方法などを中心に整理してきました。

4月以降、実際に支援を開始してからは、月に2回のペースで会議を行い、1日単位でAさんに対する支援方法やその表れ、その際どういった対応をとったのか等の実践内容を共有しました。そして、支援内容の良し悪し、次につながる実践等の評価。そして、評価から見えてくるAさんの内面を推測しての再アセスメントを実施し、次の支援計画に反映させています。

こうした、計画・実行・評価をPDCAサイクルで実施し、小さなことでも微修正しながらスモールステップを重ねてきました。



また、Aさん以外の2名の利用者さんの支援内容の見直しにも平行して取り組み、視覚的支援の評価を重ね、物の置き場所の意味付けや、自主的な活動が行えるようになってきています。チームが立ち上がった事で自閉症に関する知識を得られ、チームとしての観察ポイントが明確化された事による視点の共有がされてきたからだと実感しています。

チームで支援を開始して9か月が経過した現時点でAさんの評価は…

1：不安定時の表出行動の出方に変化は見られない

2：実践を積み重ねていく中で、支援方法の見直しや環境因子を修正することで、不安定になる頻度が減少してきている

3：安定している場面が増えたことで、Aさん・支援者双方が気持ちよく付き合える時間が増え、関係性の輪が広がっている

4：視覚的アプローチ、空間の構造化、チーム支援、継続したPDCAなどの結果、課題行動は減少してきた

【まとめ】

今回の報告で、最後にお伝えしたいこととして、強度行動障害タイプの方が落ち着いて生活できるためには、スモールステップを踏みながら長期的なスパンで支援できる体制を築いていくことだと思います。施設側の実情で、受入れ制限をする「しわ寄せ」は、当事者に降りかかることになりかねません。

浜松市内にも、対応が難しい強度行動障害を有した方はたくさんいらっしゃると思います。彼らも決して好んで粗暴行為やパニック行動を起こしているのではありません。

不安や不快をそうした形で表さざるを得ないので、氷山モデルの水面下を探る支援を続けられるよう願ってます。そして、本人が落ち着きを保てられるような手順書を、市内の各施設で作成し、どこの施設でも対応できるよう、浜松全体で支援力を高めることができるよう願っています。

社会福祉の士業ネットワーク

社会福祉分野における専門職には社会福祉士会・介護福祉士会・精神保健福祉士会・保育士会などの職能団体があり、それぞれの会員によるネットワークを構築しています。今回はそんな職能団体から社会福祉士会と介護福祉士会にスポットをあて、どんな活動をしているか紹介していきますね。

一般社団法人
静岡県社会福祉士会
☎ 054-252-9877

【社会福祉士会とは】

静岡県社会福祉士会は、ソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士資格を有する者で組織する職能団体です。会員は県内の社会福祉施設・病院・社会福祉協議会・福祉事務所などで福祉に関する相談業務を行い、その方が望む、その方にふさわしい生活が送れるように支援する仕事をしています。

【創設／会長／会員数】

・創　設：1993年（H5）5月
　2008年（H20）法人化
・会　長：山本　たつ子
・会員数：1530人

【会の活動内容（研修や研究等の実践）】

・社会福祉士のネットワーク
　豊富な人材と専門性を兼ね備えた職能団体としてネットワークを活用し個人を集約した法人としての責任ある活動展開
・研修
　自己研鑽の場として各種研修の企画運営、地区ごとでも積極的な実施
・他職種とのネットワーク
　地域の自治体や弁護士、他の専門職・関係機関・インフォーマル資源などとの連携
・権利擁護センター　ぱあとなあ静岡
　成年後見に関する相談や申立て、後見人候補者の紹介、後見人の育成など相談から受任までの一貫的支援
・福祉サービス第三者評価事業
　社会福祉事業所の運営状況等について公正・中立な評価を実施。サービス向上や情報提供・信頼性の向上
・社会福祉士養成
　資格取得を目指す方を対象に、国家試験対策講座を開講、支援
・その他の実践
　地域包括支援センター社会福祉士の支援／権利擁護への取り組み／災害対策／研究出版事業／広報など

【ネットワーク】

社会福祉士会会員相互はもちろんのこと、精神保健福祉士・医療ソーシャルワーカー・介護福祉士・弁護士・司法書士・家庭裁判所・教育機関など、生活に関する諸課題を地域で支えるために、様々な機関と連携しています。

一般社団法人
静岡県介護福祉士会
☎ 054-253-0818

【介護福祉士会とは】

「本会は介護福祉士の資質向上、社会的地位向上、介護の調査研究の実施、組織強化、制度政策の提言、県民の福祉の増進および介護の普及に寄与すること」の理念に基づき、「職能団体として社会福祉の在り方に意見をもち、県民に提供される介護サービスが良質なものであることを目指します」という活動指針を掲げ様々な活動をしています。

イメージキャラクター
かいごッチ

【創設／会長／会員数】

・創　設：1993年（H5）12月
　2009年（H21）法人化
・会　長：及川　ゆりこ
・会員数：1525人

【会の活動内容（研修や研究等の実践）】

・生涯研修制度に関する研修
　介護福祉士基本研修・介護福祉士ファーストステップ研修・実習指導者研修など生涯学習に関わる研修
・後継者の育成
・実務者研修の実施と国家試験対策
・静岡県の認定研修・委託事業
　認知症介護に関する基礎・実践・リーダー研修の開催や喀痰吸引等研修介護出前講座などの企画
・スキルアップ研修
　介護技術以外にも職場環境や人材育成、また福祉領域に共通するテーマ設定の研修企画
・グループホーム外部評価
　県内の高齢者グループホームの運営状況等について公正・中立な評価を実施。これまで100件程度受審
・委員会活動
　組織強化／連携強化／制度政策／認定介護士養成研修／調査研究／災害対策／障がい福祉／広報／講師選定／外部評価事業／ケアフェスタ／介護の学舎／高齢者権利擁護等推進事業／介護福祉4団体合同研修／出前講座

【トピックス】

県の委託事業でケアコンテスト2019を開催。食事・入浴・排泄の3部門で介護技術を競いました。

KOHITSUJI STAFF

リレートーク

Vol.6 原田 麻衣 さん

2005年入職　ドルチェ　児童発達支援管理者

Q小羊学園を志した動機は？

専門学生時代、小羊学園の事業所に実習に行った際、利用者さんの目線に立ち、丁寧に関わる支援員の姿を見て憧れ、就職したいと思いました。

Qこの仕事の嬉しいこと、悲しいことは？

利用者さん一人ひとり、感情の表現方法や、伝わりやすい伝え方等が違うので、日々の関わりの中で新しいことに気づくことができた時、いつも嬉しい気持ちになります。そういう話を働く皆さんと語り合う時間も嬉しいし楽しいです。

Qちょこっとプライベートを教えて！

家ではよく、お笑い番組をみて爆笑しています。

Q誰にリレーしましょうか？また一言メッセージを！

わかなの内藤由佳さんへ。
これからもいっしょに勉強しましょう！

法人マネジメント研修報告

1月17日支援センターわかぎにて課長級職員を対象とした、第2回マネジメント研修を開催しました。夏に開催された1回目は、組織やチームのマネジメント（運営管理）の役割を担う職員として、その組織やチームの枠組みと道筋を示すことの大切さについて考えましたが、今回は、その基となる、小羊学園の基本理念について学ぶ事を目的としました。稲松理事長を講師として、小羊学園の基本理念（創立のこころ・キリスト教社会福祉）やキリスト教と聖書を振り返る事で、キリスト教の精神に立つ事とは何かを考えました。

幹部人事交代のお知らせ

2020年1月1日付で幹部職員の交代がありました。

＊カッコ内は前職

○稲松義人（理事長）
理事長兼小羊デイケアホーム施設長

○池谷慎人（事務局長兼ぱぴるす所長）
法人本部事務局長

○紅谷純（小羊デイケアホーム施設長）
在宅支援センターぱぴるす施設長

社会福祉法人小羊学園
新卒採用　随時募集中

小羊学園では、2020 年 4 月採用の入職希望者の募集を随時しています。障がい者福祉に興味のある方、人と関わることが好きな方、私たちと一緒に働きませんか？

詳しくは、小羊学園ホームページの募集要項をご確認ください。

あとがき

最近は「障がい者」との表記をよく見かけます。「害」という漢字のイメージが良くないということでしょうか。

昨年6月にグループホームの一泊旅行に同行した時のこと。横浜の中華街でランチをするために山下公園の駐車場を利用しました。駐車場に着き『障害者駐車スペースはどこですか？』と係員に尋ねると係員の方が『ハンディキャップ（障害）エリアはこちらです』との返事が返ってきました。

「がい」や「害」ではなく「ハンディキャップ」。事の本質は表記の仕方ではないが、新鮮な響きとして残った。（K）

小羊学園を支える会

2019年度 寄付金報告

12月～1月分　2,125,397円（126件）
累　計　6,006,217円（323件）

多くのお支えに感謝申し上げます

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座　00800－8－107785
口座名義　社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行　089店　当座預金0107785
口座名義　社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。
下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局（鈴木）
小羊学園法人本部　☎ 053－584－3337